

---

**Rewrite ノベルアンソロジー**  
**4**

飯山満・小椋正雪・たねがしま鉄炮

# 青春の、 とてもとてとも酷い過ち。

文：飯山満 挿絵：ユハズ



## 登場人物



かんべ ことり  
神戸 小鳥

ガーデニングが得意な、ノリの良い瑚太郎の幼なじみ。

おとどり  
鳳 ちはや

パワーあふれる転校生。お節的な瑚太郎が、大嫌い!?



せんり あかね  
千里 朱音

学園の魔女とも呼ばれる、オカルト研究会会長。

このはな  
此花 ルチア

瑚太郎のクラスの委員長。静流と仲が良い。



なかつ しずる  
中津 静流

瑚太郎の後輩の風紀委員。無口だが、感情表現は豊か。

よしの はるひこ  
吉野 晴彦

孤独を愛するクールな一匹狼。瑚太郎のよき玩具。



てんのうじ こうたろう  
天王寺 瑚太郎

お調子者だが、世話好き。オカリ研活動以外でも、バイトの為に町の噂を集める。

イラスト：おーじ (表紙)・ユハズ・霧生実奈

カバーデザイン：上田デザイン室

このアンソロジーに収録された作品は全て、Key制作のアドベンチャーゲーム「Rewrite」をベースに、それぞれの作者が自由な発想、解釈を加え構成したものです。「Rewrite」の作品内容に関する公式見解を提示するものではありません。

さて、前回俺達は『ホラー路線』でいくか『せくしー路線』でいくか迷ってしまった。なので今回は、ホラー映像をセクシーに撮るという『せくしーホラー路線』でいくことに決めたのだ。

小鳥が「セクシーに状況説明を」と書いた紙を見せると、二人はコクリと頷いた。

そして二人のセリフを、サラサラッとまた紙に書いてそちらに向ける。

静流はカメラに視線をやりながら、それを読み上げる。

『ここは、昼間に比べて段が一つ増えているという噂の階段だ……いやーん』

マイクを通じた声が聞こえてくる。

「よし！ ナイスセクシーだ、静流！ いいセリフじゃないか小鳥！」

「えへへー。あたしのは、セクシークインとでも呼んどくれ」

よし、セクシーはこいつに任せておけば大丈夫だ。

「なあ天王寺。見る人によっては、階段が一段増えて困っているだけだと思われないか？」

委員長が眉をしかめ、カメラの画面を見つめている。

「大丈夫だ、次のちはやのセクシーさでカバーできるはずだ」

階段の上から、下を覗き込むようにするちはや。頑張れ、次は「あはーん」だ！

『あ、はーん……それは怖いですねー』

「わお！ ちーちゃん、怖いくらいにセクシーだよ！」

「いいぞちはや、セクシークインのお墨付きが出た！ 今お前は、この世界で誰よりもセク

シーだぜ！」

本当に心霊映像を撮っているのか……そんなテンションで委員長はカメラを回す。

「なあ天王寺。今の『はーん』は『ふうん』というニュアンスに取られないだろうか？」

「大丈夫だと思うぞ……たぶん」

もしそう取られたら、困っている後輩を蔑ろにしている酷い奴になってしまふ。とんでもない

マイナスプロモーションだ。

「まあいい、とりあえず続けよう」

『それじゃあ、実際に階段を降りてみる……いやーん』

イヤーンと言いながらも、静流は階段を降りていく。

「うおう！ しずちゃんも言葉にできないくらいセクシーだよ！」

「ああ、まるでセクシーの神に魅入られているようだぜ」

しかし、降りきったあとに、はっとした表情を浮かべる静流さん。なにかあったのだろうか？

『……数えるのを忘れていた……いやーん』

「……」

「天王寺。いつもの静流と行動は変わらないのに、あのセリフを言わせるとものすごく頭が悪く見える。いやーんはやめた方がいいんじゃないか？」

確かに俺もそう思った。それに「いやーん」「あはーん」ばかりじゃ飽きられてしまふ。ちは

やに指示をしなげれば。

「ちはや、いやーんあはーんはもう禁止だ。もうちよつと色気のある言葉を入れてくれ」

ちはやが一瞬「ええ!? 無理です!」という顔を見せるも、カメラの前なのですぐに表情を戻した。

『そ、それじゃあ、今度は私が数えながら降りていきましよう……え、えと……あ、あの』  
 さあ、どんな言葉が飛び出すんだ？

『れ……練乳う……』

練乳!? 確かにそれっぽい漢字ではあるけど、練乳は食べ物じゃねーか。

「ちーちゃん!? そんなセクシーなこと言ったら、セクシーの精霊に連れ去られちゃうよ!」

「今のありだったのか!」

まあ、セクシークイーンが言うんだから間違いない。

「二人とも、いい加減にしないと音声に入ってしまうぞ」

「ありや、言われてみればそうだね。セクシークイーンは引退するよ」

委員長に怒られ、俺達はセクシーなやり取りを打ち切った。

『あ、あの……さっきのつて、あれでよかったですか?』

本当に色気のある単語だと思ったのか、それとも全然違うことを言ったのが恥ずかしいのか、ちはやは顔を真っ赤にしてしまう。

「まあこれはこれで、鳳さんの可愛らしい部分が撮れたんじゃないか?」

「んー、そうかもな。でも練乳は無いから、次は『あはーん』に戻してもらおうか」

ちはやにそう指示を伝えたと、ホッとした表情を見せた。そして意気揚々と階段を降りようとする。

『ではまず一歩目です。はい、いーち。ここでは変化はわかりませんね……あ、あはーん』

おお、なかなか上手いレポートだ。

『二歩目です。やつぱり何も起こりません……あはーん』

おお、いい調子じゃないか。あはーんも自然に言える様になってるし、まさかちはやにこんな才能があるとは思わなかった。

三歩目を踏み出すちはや。カメラにも慣れてきたのか、目線を意識したまま階段を――。

『では三歩目です、せーの……ああああああああああああああああああ!!』

――階段を盛大に転げ落ちた。

「ちー!」

階段下にいた静流が慌てて駆け寄った。

もちろん、委員長や小鳥も心配そうに覗き込んでいる……が、会長と俺だけはちよつと違う。「いつものことよ、心配すること無いわ」

「まあ、そうつすよね」

そんな冷たいことを言う俺達に、委員長は驚いたような表情をするが、その顔は再びちはやに向けられることになった。

「い、いたいです……あはーん」

涙目でむくりと起き上がり、事も無げに服の埃を叩き始めた。

それを呆然と見つめる小鳥と委員長。

「なあ、天王寺……階段が増えてる云々よりも、鳳さんを撮影した方がよっぽどオカルトなんじゃないのか？」

……言われてみればそうかもしれない。

そして、この日の撮影はこれで終了となった。

翌日部室にて、眠気を噛み殺しながらの会議が行われた。

「吉野を勧誘しよう。異論のある奴はいるか？」

本当は、どうしても人が集まらなかった時にこの案を出そうと思ってたんだが、そうも言つてられない。

というのも、撮影の翌日……つまり今日。殆どの授業で居眠りをしてしまった。

まあ俺や小鳥、ちはやや会長はいいものの、真面目に授業を受けている委員長や静流にはた



# 湯煙の、 オカ研ガールズ!

文：小椋正雪 挿絵：おーじ



風祭市に霜が降りて、数ヶ月が経った。

雪こそ降らないものの、気温はぐんぐん下がりがり続け、道行く人の吐息を白くする。

もちろん此処、風祭学院もその例外ではない。多くの生徒が寒い寒いと呟きながら、それぞれ防寒対策に勤しんで下校している。

だが、それを窓から眺めている中津静流はというと、それほど寒いとは感じないのであった。彼女は元々暑さ寒さに強い質であったし、特殊な訓練を経てさらにその耐性を増している為である。

故に彼女の場合は、見た目だけの対策としてマフラーと手袋を着けて登校している。どちらも、彼女の優秀な『指導役』である教師・西九条灯花によるお手製のものだ。それぞれ少々編み目が乱れているところがあったが暖かであったし、灯花の自分に対する想いが伝わるものであったので、静流はとても気に入っていた。

そして、彼女以上に暑さ寒さに強いのは、古くからの友人である此花ルチアであろう。こちらは制服の上には何も羽織らず、周囲の目など気にもせずに、寒風が吹こうと霜柱が立とうとお構いなしで、普通に校舎の外を闊歩している。もつとも彼女の場合、白い手袋を普段から着用しているからそれで十分なのだろうと思われているようだが、それにしてももう少し寒そうなふりをした方が良くも考える静流である。(余談ながら、静流自身も普段から白いタイツを穿いているため周囲からあまり寒くないのではないかと推測されていた。無論彼女自身は気付

いていない)。

まあ、どちらにしても。

皆の——少なくとも知己のうちでも——寒さをどうにかしてあげたいと思う静流であったのだ。

「うーん、今日も寒いねえ」

その声で静流は我に返り、窓際から普段使っている会議用のテーブルに戻った。

放課後のオカルト研究会部室である。

両手に息を吐きかけながらそう言った声の主は、神戸小鳥であった。先ほどまで、委員会の仕事で外に出ていたためであろう。

「ヒートアイランドとは無縁だものね、ここ」

いつものように自分の席に座り、熱い紅茶を飲みながら千里朱音がそう言った。

「もうちよつと暖かくてもいいんですけどねえ……」

今日も今日とて、部室に用意された菓子を片っ端から平らげながら、鳳ちはやが呟く。静流も、皆とは同意見であった。

「すまない、遅くなった」

そこへ、そう言いながら部室に入ってきたのは、先ほどまで校舎の外を歩いていたルチアである。彼女は部室内にいる面々を順番に眺めると、少しだけ肩をすくめて、

「なんだ、みんな寒そうだな」

そんなことを、呟いた。

「そりやそうですよ。外気温十度を下回ってますし」

少しだけ頬を膨らませながら、ちはやがそう抗議する。何処かルチアと相性の悪いところがあるのか、時折こうして衝突してしまうふたりである。

「言いたいことはわかるが、ここまでやっていてそう寒そうにしているのは、行き過ぎだと思  
うぞ」

そう言うルチアの視線の先、部室の中央、会議用テーブルと応接用ソファの間には、小さな石油ストーブの火が灯っていた。ご丁寧に——そして実用上保温という点に関しては非常に合理的なことに——沸いた湯の入った薬缶が載っかっている。

元々はストーブなど無くとも、部室に設えられた暖房で十分であるそうのだが、このほうが雰囲気出るでしょうとのことで、会長である朱音が半ば強引に置いたものであった。ただそれは今のところ、部員達には概ね好評である。

「いいじゃないですか。寒いんですから」

それはともかくとして、ちはやは尚も仏頂面である。



と、そこへ――。

「うーす、戻りました！」

部屋のドアを派手に開け閉めして、天王寺瑚太郎が入ってきた。顔が赤いのは、そして少しだけ息が上がっているのは、寒い中を走ってきたためであろうか。

「元気ねえ、おまえ」

呆れたように、朱音がそう言う。

「いやあ、身体を動かしていた方が楽なんです。というわけでオカ研ボスターの張り替え、終わりました」

きちつと報告して、朱音に向かって敬礼する瑚太郎。どうでもいいことだが、軍隊などに所属している――或いは所属していたわけでもないのに、妙に敬礼が上手いなと静流は思う。

「ご苦労様。少し暖まりなさい」

「ありがとうございます。会長」

そう言つて朱音に一礼すると、瑚太郎はストープに手をかざす。

「くうー！ アジの開きの気持ちが良いわかる！」

「いやいやあんさん、そこはどっちかというどぐねぐねと曲がるスルメじゃないかい？」

「どっちにしても、なんで魚介類なんです？ まあ、美味しそうですからいいですけどー」

ちはやの意見には賛成だが、どちらかというど炭火の上でこんがりど焼けるさんまだろうと

思う静流である。まあそんな静流の思はお構いなしに、ルチアはしてやったりといった感じの表情で、

「見ろ、天王寺瑚太郎は元気じゃないか」

「瑚太郎と一緒にしないでくださいー！」

ちはやの抗議も、ある意味もつともだと思ふ静流であった。

なにせ、瑚太郎は男子である。ちはやと同じ格好をしたらきつと似合わないに違いない。

「一直線ぶりは似たようなものだろうに。なあ静流――静流？」

ルチアの怪訝な声に、静流は自分が上の空であったことに気付く。

「どうかしたのか、るちあ」

慌てて平静を装つてそう言つと、ルチアは少し心配そうな貌かおで、

「いや、なんか考え事をしていたような気がしたんだが……どうしたんだ、一体」

流石は長いこと一緒にいたルチアである。静流の様子など、まるでお見通しなのだろう。

「うむ――」

だから静流は、素直に話すことにした。

「みんなの寒さを和らげるのには、どうすれば良いのかを考えていた」

途端、その場にいた全員が熟考の姿勢をとる。どうも、多かれ少なかれオカルト研究会の全員が同じようなことを考えていたらしい。

# 海にでも 行きましょう

文：たねがしま鉄炮 挿絵：霧生実奈



石松の店長さんが、みなを代表してことりとちーに頭を下げる。

「え……えと、その、出る出ろって一体、何に出なきやいけないのさ……?」

面食らうことり、事態をいまだ把握できていないちーの手を引つ張って、一同は商店街の奥へと消えていった。

「ど……どうなってるんだ、コタロー?」

「お……俺が知るかよ!」

戸惑いつつも、私たちはその後を追った。

そして。

商店街の中央にまで辿り着いた辺りで、何やら雰囲気が変わってきたことに気づく。

人々がハッピを着て、手に手にアメリカンドッグやリングゴ飴やチョコバナナや何かを持っていく。子供たちを見れば、その手にはヨーヨーや小さなビニール袋に入った金魚を提げていた。

「コタロー、これは?」

「夏祭りかな?」

そんな風に話しあっていると。

「みなさま、お待ちせしました!!」

向こうの方から、ハウリングの激しいマイクを通した声が響き渡った。

「これより風祭学院高校オカルト研究会の神戸小鳥さん、鳳ちはやさんによるアトラクションショーを開始いたします!」

見れば、お祭り用の特設ステージなのだろう、路上に組み上げられた舞台の上のことりとちーの姿があった。

「おい……小鳥……ちはや……」

コタローも呆然と声を上げる。

無理もない。ステージ上のことりは、何だか新人のお笑い芸人みたいな全身タイツ、一方ちーは戦隊っぽいヒーローのコスチュームを、それぞれ身に纏っていた。

「「羅」だ。また水着とは違ったが、ふたりとも紛れもなく薄物を着る羽目に陥つたのだ。」「さつきあの人たちがふたりに『出る出る』って言ったのは、これだったのか?」

私の問いに、コタローが頷く。

「みたいだな……しかし小鳥のやつ、人前に出るのは苦手だろうに……」

おろおろと、まるでお母さんみたいな顔で、コタローがことりを案ずる。

なるほど、商店会の人たちは緑を増やそう委員会での、ノリのいいことりしか知らず、こんな大役を押しつけてしまったらしい。

そして壇上では。

「え……えと、あの、そのお……」

タイツ姿のことりが戸惑いつつも、モノマネのターンに入る。

「入りたくねえなあ〜」

ひとり、ことりはステージ上で何かに怯えてみせる。

「俺、入ろうか？」

「じゃあ、俺も入ろうか」

「じゃあ俺が入るよ」

「どうぞどうぞどうぞどうぞどうぞ」

「どうぞどうぞどうぞどうぞどうぞどうぞ」

ひとり三役で熱演することり。

「押すなよ！ 押すなよ！ 絶対に押すなよ!!」

嫌がりながらも、ステージの床へとダイブ。

「押すなっつたろーが!!」

……。

……。

……。

終わりらしい。

——寒い。

言つては悪いけれど、寒い。

いや、それは本人が一番よくわかっていいるのだろう。

芸を終えたことりの額には縦線が入り、その部分はずす黒い暗黒のオーラが、まるで極小プ

ラックホールのごとくに発生してしまっている。

「え……え〜と、それでは代わりまして」

雰囲気を探してか、ちーが前に出てきた。

「私、鳳ちはやがゲーケンジャージュアシーショをやらせていただきます!」

見ればステージの中心にはヒーロー姿のちーが立ち、脇には黒覆面黒タイツの戦闘員がわらわらと湧いて出てきた。

やれやれ。

これなら盛り上がるだろうと、私は内心、胸を撫で下ろした。

のだけれど。

「ええ〜いっ! 正当防衛ば〜んちっつ!!」

ちーの拳が、立ち向かってくる戦闘員Aを大きく外し、ステージの柱へと叩き込まれる。

——ばきいっつ!!

と、柱は真つ二つに折れてしまった。

「あ? あれ? あはは、すみません」





VA文庫

# Rewrite ノベルアンソロジー 4

2012年 2月29日 初版第1刷 発行

- 著 者 飯山満・小椋正雪  
たねがしま鉄炮
- イラスト おーじ・ユハズ・霧生実奈
- 原 作 Key
- 製 作 株式会社パラダイム

発行人：馬場隆博  
発行元：株式会社ビジュアルアーツ  
〒531-0073  
大阪府大阪市北区本庄西2-12-16  
VA 第一ビル  
TEL 06-6377-3388

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、  
かたくお断りいたします。  
落丁・乱丁はお取り替えいたします。  
定価はカバーに表示してあります。

©HASAMA ©MASAYUKI OGURA ©TEPPOU TANEGASHIMA  
©VisualArt's/Key

Printed in Japan 2012

VA016



**ドキッ!**  
水着たぎりのオカルト研究会  
文：桃山ふみか 挿絵：佐倉りお



**さんざんサント**  
・ウカーリア  
文：小椋正雪 挿絵：ユハズ



**カラスーシング**  
～瞳をたいとまに誘ったスリ～  
文：飯山満 挿絵：露生美奈



**2**  
Rewrite  
バルアンソロジー

VA文庫11  
定価 590円(税込)

好評発売中

キネティックノベル大賞  
受賞者も続々参加中!



**迷走する弾丸**  
文：飯山満 挿絵：館川まこ



**奪われた記憶**  
文：たねがし鉄炮 挿絵：こる



**爆裂!**  
**アームレスリング**  
文：桃山ふみか 挿絵：一真

**1**

Rewrite  
バルアンソロジー

VA文庫10  
定価 590円(税込)



ひみっ  
**秘密を...**

花嫁修業って、  
本当ですか？

知りたいんです？

Secret...We would like to know, it is?

好評発売中



神秘的森に  
マントラココを見た！  
文：桃山ふみか 挿絵：みよしの



耳がき一杯の、幸せ  
文：小椋正雪 挿絵：Capura.L



ちばやがロボって  
本当です？  
文：たねがしま鉄炮 挿絵：一真

VA文庫13  
定価 590円(税込)

Rewrite  
リライト

3  
Rewrite  
パルファンロシー



小椋正雪・桃山ふみか・たねがしま鉄炮  
Capura.L・みよしの